

# 遊休地を活用したイタドリ栽培について

林業試験場 特用林産部 杉本小夜

## 〔はじめに〕

イタドリは県内に広く分布し、産品販売所等で広く販売されている主要山菜の一つである。現在消費されているイタドリの殆どは山採りであるが、近年、乱獲や環境の変化、シカの食害などにより、高品質のものの確保が年々困難になってきており、効率的な栽培化への要望が高まってきている。

これまで林業試験場では、栽培に適した苗の種類の検討や遊休地を用いた栽培実証試験を行い、その成果を技術指針にまとめてきた。しかし、定植後における収穫量の経年変化については調査中であるため、今回は、植栽苗の種類、施肥、マルチなど育成方法別における定植3年目及び4年目の収穫量、成長量について報告する。

## 〔材料と方法〕

### 1) 苗の種類・施肥別栽培試験

植栽株は形態別に山引き株、実生苗、地下茎苗の3種類を用いた。それぞれ、施肥区、無施肥区を設け、平成22年3月に定植後、毎年収穫量、成長量を調査した。

### 2) マルチによる省力化栽培試験

植栽株は地下茎苗を用い、黒マルチ区、マルチ無し区を設置した。平成23年3月に定植後、毎年収穫量、成長量を調査した。

## 〔結果と考察〕

### 1) 苗の種類・施肥別栽培試験

3年目の収穫量は一株当たり0.2~1.2本、9~69gといずれの区も少量であるが収穫が可能となった。4年目の収穫量は1株当たり1.4~3.3本、89~205gであり、重量で前年の2.7~10倍となり、本格的な収穫が見込めるようになった。

苗の形態別の収穫量では、地下茎苗が定植3年目、4年目の合計が最も多くなった。

施肥については、収穫量に与える影響は明確ではなかったが、その後の成育については、施肥区が無施肥区よりも良好な傾向にあった。

### 2) マルチによる省力栽培試験

株当たりの収穫量は、黒マルチ区で3.9本、232g、マルチなし区で1.4本、88gとなった。今回追肥をせずに栽培を行ったが、黒マルチ区では雑草の影響を排除でき、定植3年目からまとまった収穫量が可能となった。

成長量については、黒マルチ区はマルチなし区と比較して発生本数、草丈、株径ともに大きく、良好な成育となった。

黒マルチは除草作業の軽減、収量の増加、早期収穫に効果的であると考えられた。

表1 植栽苗の種類・施肥別収穫量

試験区	植栽株	施肥	株数	2012年(定植3年目)			2013年(定植4年目)			
				生存株数	収穫本数 (本/株)	収穫重量 (g/本)	生存株数	収穫本数 (本/株)	収穫重量 (g/本)	重量 前年比(倍)
A-1	山引き株	なし	20	15	0.1	9	11	1.4	89	10.1
A-2	山引き株	元肥・追肥	20	18	0.6	38	17	2.1	143	3.8
B-1	実生苗	なし	20	18	0.5	34	17	2.8	192	5.7
B-2	実生苗	元肥・追肥	20	18	0.2	17	16	1.8	128	7.3
C-1	地下茎苗	なし	20	18	0.6	38	18	3.2	205	5.5
C-2	地下茎苗	元肥・追肥	20	17	1.2	69	16	3.3	187	2.7

※耕耘・畝立て: 畝高15cm、畝幅A120cm、B・C100cm、畝長500cm、株間A60cm、B・C50cm

※収穫量は若芽の根本径1.5cm以上、長さ50cmを基準とした。

※収穫は2012年4月6～23日および2013年4月1～19日に行った。

※生存本数調査は2012年7月17日および2013年4月19日に行った。

表2 マルチの有無別収穫量および生育状況

試験区	植栽株	マルチ	施肥	株数	生存株数	収穫量		生育状況					
						収穫本数 (本/株)	収穫重量 (g/株)	発生本数		草丈(cm)		株径(cm)	
								平均	SD	平均	SD	平均	SD
I	地下茎苗	黒マルチ	元肥	10	9	3.9	232	6.4 ± 2.4		260 ± 23.5		15.4 ± 4.0	
J	地下茎苗	なし	元肥	10	8	1.4	88	3.6 ± 1.9		211.3 ± 24.7		14.4 ± 4.9	

※収穫量は若芽の根本径1.5cm以上、長さ50cmを基準とした。

※収穫は2013年4月1日～19日、生育状況調査は2013年9月4日